# 「釧路湿原の歩み」

| | |
|---|---|
| 1858年（安政5年） | 松浦武四郎が江戸幕府から蝦夷地調査を命じられ、釧路川を丸木舟で下り、釧路湿原を縦断。その記録「東西蝦夷山川地理取調日誌」には、「谷地多し」「川の両岸が茅原」などの湿原の情景が描写されている。 |
| 1885年（明治18年） | 釧路湿原西側の下雪裡地区へ27戸が移住し、現在の鶴居村の始まりとなる。<br>釧路湿原東側の標茶地区に釧路集治監が開設される。塘路地区に熊牛村外四ヵ村の戸長役場が設けられ、現在の標茶町の開発が始まる。 |
| 1892年（明治25年） | 釧路～標茶間の道路が全通する。 |
| 1918年（大正7年） | 釧路川に合流していた阿寒川の流路を切り替え、阿寒新川（現在の仁々志別川～新釧路川の流路）として釧路川から分離。 |
| 1920年（大正9年） | 釧路川、阿寒川が氾濫し大洪水となる。この洪水により阿寒川が大楽毛川へ転流し、仁々志別川～阿寒新川から分離したため、釧路川、仁々志別川、阿寒川の3水系となる。 |
| 1921年（大正10年） | 前年の大洪水の復旧と水害防止のため、釧路川から分岐し、太平洋へ注ぐ派川の掘削工事（新釧路川開削工事）が国により始まる。 |
| 1924年（大正13年） | 釧路湿原キラコタン岬付近（鶴居村）で、明治時代末に絶滅したと考えられていたタンチョウが十数羽確認される。 |
| 1925年（大正14年） | 釧路湿原のキラコタン岬周辺が国設「クッチャロ太禁猟区」となる。 |
| 1927年（昭和2年） | 釧路湿原の東側に沿って、釧路から標茶まで国鉄（釧網線）が開通する（1931年全通）。 |
| 1928年（昭和3年） | 釧路市新富士～鶴居村中雪裡（28.8km）、下幌呂～上幌呂（15.4km）に殖民軌道馬力線が敷設される。<br>塘路漁業共同組合結成。塘路湖を中心にワカサギ、ウナギの養殖事業が始まる。 |
| 1930年（昭和5年） | 雪裡川の流路を、開削された新釧路川へ切り替え。下流（現在の旧雪裡川）は新釧路川の左岸堤防により分断される。 |
| 1931年（昭和6年） | 釧路湿原内を通る釧路町岩保木に水門が完成し、太平洋に注ぐ「新釧路川（11.2km）」へ通水が行われる。<br>雪裡川に合流していた久著呂川を、直接釧路川へ切り替える新水路が完成。 |
| 1933年（昭和8年） | 釧路港内への土砂流入防止のため岩保木水門が閉鎖され、旧釧路川（現在の釧路川）の下流部分が分断される。 |
| 1934年（昭和9年） | 釧路右岸堤防（幌呂川右岸～新釧路川右岸）完成。 |
| 1935年（昭和10年） | 釧路湿原のタンチョウとその湿原中央部の生息地「釧路丹頂鶴繁殖地（2700ha）」が国の天然記念物に指定される。<br>「釧路国丹頂鶴保護会」が結成される。 |
| 1949年（昭和24年） | 釧路川中上流部（弟子屈町・標茶町）の改修工事が始まる。以降1980年代まで、沿川の洪水防止と、地下水位を低下させ土地利用を促進するため、捷水路・新水路による河川の直線化や、堤防の整備が各地点で行われる。 |
| 1950年（昭和25年） | 阿寒町（現　釧路市阿寒町）の山崎定次郎氏が、釧路湿原につながる自分の畑に飛来するタンチョウを絶滅の危機から救おうと、給餌を始める。釧路湿原周辺での人工給餌の始まりといわれている。 |
| 1951年（昭和26年） | 釧路市が国に釧路泥炭地（釧路湿原）の開発を陳情。<br>北海道開発庁（現 国土交通省北海道局）が「釧路泥炭地開発計画」を策定。 |
| 1952年（昭和27年） | 「釧路丹頂鶴繁殖地」が「釧路のタンチョウ及びその繁殖地（2750ha）」に名称変更され、国の特別天然記念物に指定される。<br>北海道教育委員会による第1回「タンチョウ生息状況一斉調査」が行われ、33羽を確認。<br>鶴居村立幌呂小学校の子供達が、村の畑で雪の中にうずくまっていたタンチョウに給餌を行い、餌付けに成功する。 |
| 1954年（昭和29年） | 鶴居村立幌呂小学校がツルの保護活動により農林大臣賞表彰を受ける。 |
| 1955年（昭和30年） | 標茶町五十石の飯島一雄氏が、釧路湿原でガの新種「イイジマキリガ」を発見。 |
| 1957年（昭和32年） | 標茶町五十石の飯島一雄氏が、釧路湿原で「エゾカオジロトンボ」を国内で初めて発見。<br>阿寒町立（現 釧路市立）阿寒中学校に、釧路湿原から町内に飛来するタンチョウを絶滅の危機から救おうと「ツルクラブ」が発足。 |
| 1958年（昭和33年） | 国が釧路泥炭地（湿原）で農地開発試験を始める。<br>阿寒町立（現 釧路市立）阿寒中学校がツルの保護・研究活動により北海道知事表彰される。<br>北海道学芸大学釧路分校（現　北海道教育大学釧路校）の田中瑞穂教授が、論文で釧路泥炭地を「釧路湿原」と呼び変えた。<br>釧路湿原のタンチョウの保護と増殖を目的に、釧路市鶴丘に「釧路市丹頂鶴自然公園」が開設される。最初に飼育された5羽のタンチョウを釧路湿原で捕獲したのは標茶町塘路の漁師・土佐藤蔵氏だった。<br>東釧路貝塚での発掘調査で、釧路市立郷土博物館（現　釧路市立博物館）学芸員の澤四郎氏らが、当時、縄文前期のものでは道内最古の推定4000～5000年前と推測される人骨を発見。先史時代から釧路湿原で人が暮らしていたことを実証した。<br>作家の原田康子氏が、旅行雑誌に紀行文「釧路湿原から阿寒への旅」を寄せ、全国に釧路湿原の名を広げた。<br>北海道学芸大学釧路分校（現　北海道教育大学釧路校）の田中瑞穂教授が、釧路湿原の植物を子供向けに解説する「こどものための東北海道の植物」を自費出版。釧路湿原の植生を市民に伝えた先駆けとなる。 |
| 1960年（昭和35年） | 岡崎由夫・北海道学芸大学釧路分校助教授（現 北海道教育大学釧路校名誉教授）が、泥炭が堆積する早さを「1年に1mm」、釧路湿原が海の後退により姿を現したのは「約3000年前」とわりだし、発表する。<br>釧路湿原の周辺で毛皮用アメリカミンクの養殖が始まる。 |
| 1961年（昭和36年） | 標茶町が町立自然公園として塘路公園を指定。 |
| 1963年（昭和38年） | 北海道開発庁（現 国土交通省北海道局）より「北海道未開発泥炭地調査報告」刊行。<br>北海道開発庁（現 国土交通省北海道局）が「釧路原野農業開発基本計画」を発表。 |
| 1964年（昭和39年） | 阿寒町立阿寒中学校（現 釧路市立阿寒中学校）「ツルクラブ」が、釧路湿原のタンチョウの給餌をする姿がテレビで全国放映され、全国から同校に「タンチョウ保護に役立てて」と大量の餌や寄付金が寄せられる。 |